



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	日本語敬語および関連現象の社会語用論的研究 [全文の要約]
Author(s)	滝浦, 真人
Description	この博士論文全文の閲覧方法については、以下のサイトをご参照ください。 https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	乙第7006号
Issue Date	2017-03-23
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/65750
Type	doctoral thesis
File Information	Masato_Takiura_summary.pdf



北海道大学大学院文学研究科
博士（文学）学位論文

日本語敬語および関連現象の
社会語用論的研究
【要約】

平成 29（2017）年 2 月

滝浦真人

本論文の内容構成

本論文の第 1 部～第 4 部はいずれも単行本として刊行されたものである。今回、博士論文として提出するに当たり合本版とした。書籍版の書誌は以下の通り。

第 1 部 『日本の敬語論 ——ポライトネス理論からの再検討』

（単著、大修館書店、2005 年 6 月 15 日、330p.）

第 2 部 『ポライトネス入門』

（単著、研究社、2008 年 9 月 1 日、176p.）

第 3 部 『山田孝雄 ——共同体の国学の夢』

（単著、講談社、2009 年 9 月 30 日、220p.）

第 4 部 『日本語は親しさを伝えられるか』

（単著、岩波書店、2013 年 4 月 24 日、216p.）

本論文は、内容的に 5 つの部分から成るものと整理される。（以下、各部や各章を、〔①- I / II / III〕（＝第 1 部のパート I / II / III）、あるいは、〔①-II-1〕（＝第 1 部のパート II 第 1 章）等、〔②-1/2/…〕（＝第 2 部の第 1/2/…章）、〔③-1/2/…〕（＝第 3 部の第 1/2/…章）のように略記する。）

1. 敬語の思想史 [①-I]
補・「親愛」の敬語をめぐって [③-4]
2. ポライトネスと敬語 [①-II, ②-1~3]
3. 敬語の語用論のために [②-3, ①-III]
補・「人称説」をめぐって [③-3, ①-III-1]
4. 距離の語用論 [②-4, ①-II-1, ②-6]
5. 敬語とポライトネスの対照語用論 [②-5, ④-1~5]

概 要

本研究は、日本語における敬語など対人関係表現と関わりの深い言語形式およびその機能について、語用論的、とりわけポライトネスの観点から包括的かつ統一的に説明することを目的とする。方法的な補助概念として、相対的な(心理的・社会的)〈距離〉(Yule 1996)を導入することによって、対人関係の言語表現に関する一般理論として提唱されたポライトネスの理論と敬語とを齟齬なく接続できることを示す。さらには、敬語と非敬語の対立を組み込んだ日本語の談話文法を〈距離〉の観点から捉え直すことによって、授受動詞について提唱されてきた〈視点〉の理論とも統合することができ、また、呼称、指示詞、終助詞といった対人関係に敏感な言語形式がもつ機能についても、対人距離における遠近の比較的単純な組み合わせとして説明・解釈できることを主張する。

さらに、そこからの応用的な展開として、ポライトネスを尺度とした言語文化論的考察を、日本語の他の時代(や方言)および近隣諸言語との比較対照において行う。敬語や定型あいさつ言葉のような対人関係専用の手段が顕著な言語と、そうでない言語とを対比することによって、前者において相対的に大きな対人距離が安定的に選好され、後者において相対的に小さな対人距離が選好される傾向を見ることができる。東アジアにあつて日本と歴史的つながりの深い言語文化である中国語、韓国語との対照、同じ日本語における現在の標準語と江戸後期の町人言葉との対照を通じて、一般庶民の話す日本語が標準語の制定・普及の過程で対人距離の大きな言語へと変質したのではないかとの仮説的考察を行なう。

以下、5つの部分の各々について概略を記す。

1. 敬語の思想史 [①-I]

学術研究が先行研究を踏まえてなされるべきことを考えたとき、敬語の語用論研究は開始すること自体の困難さという問題に突き当たる。日本語敬語には膨大な研究の蓄積が存

在するが、語用論的観点すなわち敬語の使用に関心を向けた理論研究は、研究史上に数えるほどしかない。しかし同時に、それら少数の研究は、現代的な語用論的観点と通じるところが多く、詳しい検討に値する。こうした情況にあつては、語用論的観点をもった研究を単に先行研究とするだけでなく、敬語の使用に関心を向けなかった研究の主流が見ようとしてきたものについても、いわば反面的な先行研究として評価しておく必要がある。日本における敬語の思想史が本研究の先行研究として欠かすことができない所以である。

日本における日本人による敬語研究の始まりは2つの特徴を帯びている。まず、日本語に対する学問的関心は江戸期の国学においてすでにそれなりの高まりを見せていたにもかかわらず、敬語が学問的対象として登場したのはかなり遅い19世紀末だったという経緯がある。そして2つめに、その背景事情でもあることとして、初期敬語論が非常に強いナショナリズム的関心とともにあった点を指摘しないわけにはいかない。三橋要也(1892)を嚆矢として、敬語に関する初のモノグラフを書いた山田孝雄(1908, 1924)、独自の文法論を展開した松下大三郎(1923)らにとって、いずれも敬語は、「君子の国」の「礼儀の俗」であり、日本人の「推譲の美風」や「思いやり(思遣)」の表れとして、強く賞賛されるべき対象だった。そしてこの立場がそのまま敬語研究の主流となった。敬語の本質を(民族的な精神性とも相通ずる)「敬意」に求め、敬語の意味論を考察の基盤とするような流れを、本研究では〈敬意〉の敬語論と呼ぶ。

〈敬意〉の敬語論の主張を、単に時代的空氣の産物であるとか、過去における観点の偏りといって済ませることはできない。それは端的に、初期敬語論で唱えられた言説が、現代における敬語の学問的把握においても生きているからにほかならない。山田の影響は特に大きく、理論面でいえば、山田の唱えた「人称説」と「親愛」の敬語の問題は看過できない。本研究としては、ともに誤解や錯覚に基づいており学説としてはそもそも成立していなかったとの立場を採るが、現在でも概説書などで形を変えた説明が行われている。このことが、敬語の語用論的研究を遅らせた側面があると本研究は考える。「人称説」については「3. 敬語の語用論のために」であらためて述べ、「親愛」の敬語については下の補説で述べる。

〈敬意〉の敬語論に相対する立場を、本研究では〈関係認識〉の敬語論と呼ぶ。敬語が参与者間の人間関係全体を捉えることに着目する立場と言うことができ、それゆえ(現代の用語でいえば)語用論的な関心に裏打ちされている特徴がある。ただしこちらは、流れと呼ぶことさえ躊躇われるほどの、間欠的な、それゆえ相互の影響関係がない形で現れた。最初の例は三橋要也より300年近く古い、17世紀初頭に宣教師ロドリゲスによって書かれた日本語文法の記述にある(Rodriguez 1604-08)。その最大の特徴は、敬語の体系と語の

意味論だけでなく、実際の使用場面における敬語の使用条件に関する詳細な記述を含んでいたことである。なかでも特筆すべきは、聞き手人物が最上位者である場合や、話題の人物が最上位者である場合など、人物間の上下関係に注意を払わなければならない際の条件の説明に注力されていることである。日本語敬語において聞き手から見て敬語待遇に値するか否かが使用条件になるという、今日では「相対敬語」と呼ばれることになる性質を完全に捉えていたとすることができる。

通訳を任務としていたロドリゲスにとっては自然な関心だったとも考えられるとはいえ、言語学的に見て、きわめて早い時期にこれだけの語用論的記述があったことの実例として注目に値する。ロドリゲスの文法書はイエズス会内部向けであり、長いこと日本人の目には触れなかったと思われるが、明治半ばに帝国大学の教師に迎えられたチェンバレンはロドリゲスの写本を読んでおり、チェンバレンの講義を通じてその業績が学生たちに伝えられた可能性は高い。チェンバレン自身の著作でも相対敬語性についての指摘がある（Chamberlain 1888/89）。しかしながら、初期敬語論においてロドリゲスの痕跡を見出すことは全くできず、20世紀までの間に〈関係認識〉の敬語論が主流となる（ないし影響を与える）ことはなかったと見なければならない。

次に現れたのは1940年前後のことであり、ほぼ同時期に、しかし相互に独立に、ともに〈敬意〉の敬語論に対する批判としての側面ももった敬語論が、時枝誠記（1938, 1941）と三上章（1942/53）によって展開された。時枝は「敬語は敬意の表現である」という捉え方自体を問題視し、「わきまえ」の概念を対置しながら、「敬意」を超克することが敬語論にとって必要だと説いた。三上は、「虚礼」という独特の言い方で敬語のコミュニケーションを表現し、「敬語法のA [=相手] 線」という言葉で日本語敬語の相対敬語性を語った。しかし、時枝の議論は端的な「敬意否定論」と受け取られて微妙な扱いを受け、三上も、在野の学者だったことや、厳密さより着想重視の論じ方もあって、没後まで可能性の中心においては理解されなかった。

彼らの基本的なスタンスは、言語をかなり自律的なシステムと見て、それが人や社会の何をどう捉えて表すかについての関心に基いていた。現実の社会そのままの姿ではなく、言語がそこから抽象して表示する対象とその仕方を問題にしたと言える。日本語敬語について彼らがともに見出したのは日本語の「相対敬語」性であり、敬語の視点すなわち使用基準が、話し手ではなく聞き手の位置にあることであった。のみならず、話し手自身を尊敬語待遇するいわゆる「自敬敬語」や、話し手から見た目下の第三者に対する尊敬語待遇といった、一見すると例外的や奇妙に思える現象についても同じ視点的メカニズムで説明できると主張された点は、言語というシステムの機能に対する説明として高く評価するこ

とができる。

この説明法の新規性は、単に「相対敬語」を捉えることにではなく、話し手と聞き手（と話題の人物）の間の人間関係像を敬語がそのつど描き出すことを捉える点にある。それゆえ、現実の社会内のある一通りの人間関係を鏡のように映すのではなく、聞き手から見える人間関係像を文脈に応じてそのつど話し手が引き取って表現するという、すぐれて語用論的な運用面を正確に反映することができる。コミュニケーションにおける敬語の機能を考察するには不可欠の観点と言え、現代日本語における敬語の機能を考える際にも基本的にそのまま通用する。その後 1960 年代まで彼ら自身による主張や展開がなされはしたが、それらを統合したり引き継いで発展させようといった動きは残念ながら起こらなかった。

戦後になって、言語政策的には、国語審議会の建議「これからの敬語」（1952、部会長・金田一京助）によって敬語の民主化が図られ、人々の言語生活に大きな影響を及ぼした。

「上下関係」が基本だった人間関係が「各人の基本的人格を尊重する相互尊敬」という基準に置き換わり、いわば“タテ”の関係が“ヨコ”に変わることになった。しかしながら、このことによって敬語研究のスタンスが大きく影響を受けた形跡は見られない。敬語の民主化に伴いナショナリズムの色彩が多少薄まった程度で、主流の枠組みは〈敬意〉の敬語論のまま変わらなかった。

補・「親愛」の敬語をめぐる [③-4]

第3部では、山田孝雄の学問について検討した。山田文法学の構想を理解する上で欠かせない背景と経緯を見た上で [③-1, 2]、山田の敬語論を考察した。まず「親愛」の敬語について検討する。

『敬語法の研究』（1924）で山田は、敬語は丁重な礼のみならず「親愛」の意を表すと述べ、古代における天皇などの自敬敬語と明治のそれとの間の共通性を説く。奇妙な強調と思えるこの議論の鍵は、山田が明治という時代を長い武家支配からついに脱却した王政復古の時代と捉えていたことにある。そして、その新時代における天皇と民の関係は「軍人勅諭」において「其親_{〔したしみ〕}は特に深かるべき」と書かれた「親」にほかならない。つまり山田は、上下相交わる「親愛」の情の表れであり明治の新時代に復活した「国民の真の声」であるものとして、「敬語」を語りたかった。

現在でも「敬語の用法」に「親愛」を含める概説書は多いし、敬語の使用は「ポジティブ・ポライトネス」（後述）も表すといったミスリーディングな記述も散見されるが、その大元は山田の「親愛」にまで遡ることができる。しかしながら、「あなたもいらっしゃる？」のような用法に感じられる“親愛”は、尊敬語「いらっしゃる」に宿るのではなく、同一人

物が兼ねる聞き手役割に対する敬語「ます」が使用されないことによる相対的な近接化の効果——「いらっしゃいますか」における二重の敬語待遇と、うち1つが欠落した「いらっしゃる」との対人距離の差——である。従って、「親愛」の敬語は、敬語の使用ではなく敬語の不使用による距離の操作として、敬語の語用論におけるトピックとなるべきものである。

2. ポライイトネスと敬語 [①-Ⅱ, ②-1~3]

敬語が日本語に限られた言語形式でないことは言うまでもなく、対人関係の言語表現に関する一般理論において然るべき位置を与えられるはずのものである。しかし、従来そうした有力な理論がなかったこともあって、日本の敬語論は敬語だけを考察の対象とし、類似の機能を果たす他の現象との関係などが考察されることもなかった。それゆえ当然、言語普遍的な仕組みの個別言語的な表れといった捉え方もなされなかった。1970年代から盛んになった「ポライイトネス」(＝言語的対人配慮)の概念が、この状況を変える可能性をもたらした。

なかでも、ブラウンとレヴィンソン(以下B&L)によって提唱されたポライイトネス理論(B&L 1978/87)は、以下に述べる理由から、日本語敬語を理論的に説明するのに好適であると考えられ、そこで本研究はB&Lのポライイトネス概念と敬語とを理論的に接続することを試みる。B&Lの枠組みには、先行的な理論的背景として、社会学者のデュルケーム、ゴフマンと、言語哲学者グライスの名前が登場する。本研究はそれを、理論の人類学・社会学的背景と語用論的背景と見て、その2つの系列の背景を合体させて1つの理論を成したところにB&Lの功績があったと論じる。

人類学・社会学的背景では、まずデュルケームの儀礼論(Durkheim 1912)において、原初的宗教で聖なるものに対してとられる消極的／積極的な態度とその効果が論じられた。現代社会における個人間的コミュニケーションに目を向けたゴフマンの儀礼論(Goffman 1967)でも、互いの聖性に対する回避的／呈示的儀礼によって形成される秩序が考察された。それらを引き継ぎながらB&Lが作った枠組みには、人が互いに尊重し合う基本的欲求としてのフェイスを保持するネガティブ／ポジティブ・ポライイトネスのストラテジーが据えられた。これらの議論はいずれも対象に対してとられる〈距離〉の理論として読み替えることができ、上の消極的／積極的等の3つの対は遠隔化(距離化)／近接化(脱距離化)という2方向的なスキーマと見ることができる。このスキーマにおいて敬語は、遠隔化の典型的手段となる。さらには、敬語 対 非敬語(タメ語)の対立と平行的に、たとえば呼称における敬称／親称の対立も基本的に同類の機能対立として捉えることができる。

B&L のもう 1 つの語用論的背景では、グライス (Grice 1989) の協調の原理および 4 つの格律 (格率) と、対人配慮を含んだ自然な会話との関係が論じられた。協調の原理とは実質的に情報伝達における効率性の原理のことであると見るならば、対人配慮はそこからの意図的な逸脱において表現・伝達される推意として捉えることができる。B&L はそのように考えた上で、逸脱の度合いの大小と表現に込められる配慮 (顧慮・躊躇) の大小が反比例の関係にあるようなモデルを提案した。逸脱のない配慮ゼロの「直言」から段階的に躊躇が大きくなり、共感的配慮の「ポジティブ・ポライトネス」、敬避的配慮の「ネガティブ・ポライトネス」、言及すること自体を回避する「ほのめかし」、発話すること自体の回避、の 5 つの階梯からなる。このモデルもまた、伝えたい事柄について話し手がどの程度直接的に言及するかという一種の対事的な〈距離〉に基づいている。

こうした枠組みに敬語を置き入れることは容易である。わざわざ特別な語形を用いる敬語が余剰的に効率性の原理から逸脱することは明白であり、言及自体は回避せずに相対的に大きな敬避的配慮を表現・伝達する手段の 1 つであると考えられる。そのように見るならば、敬語は指示対象の遠隔化を基本義とするネガティブ・ポライトネスの原型的形式であると言え、非敬語 (タメ語) が、指示対象を遠隔化しないことによって対象との距離が相対的に近接的となる (文脈によっては直言だけでなくポジティブ・ポライトネスともなる) 形式であるのと対をなすと言うことができる。このことは日本語に限らず敬語一般に当てはまると考えられるので、本研究は以上の考察に基づいて B&L の理論を“枠組みとしての普遍”と見なし得るものと考えた。

ポライトネスの各論においては、敬避的なネガティブ・ポライトネス (以下 NP) と共感的なポジティブ・ポライトネス (以下 PP) が、各々、遠隔化と近接化のポライトネス・ストラテジーとして考察の中心となる。敬語は NP のストラテジー 5 「敬意を払う」の一形態として位置づけられる。日本語における敬語の存在感の大きさに比してカテゴリーが小さいと見る向きもあるが、NP 全体を通底する契機とその表れの問題として捉えるべきであるとする。本研究は、B&L の NP とは、遠隔化 (距離化) の契機と間接化の効果からなるストラテジーであり、敬語は契機と効果の両面にわたるその原型的な言語形式であると了解する。

B&L の考察は十分深く、敬語は個別的な会話の含み (推意) の結晶化であるとした上で、話し手・聞き手・話題の人物・同席者・場面を関与者とする「敬語の軸」を置く。これによって日本語敬語についても、聞き手を対象とする対者敬語と、話題の 3 人称者を対象とする素材敬語とを分けることができる。ポライトネスの問題としては、聞き手に対して直接向けられるポライトネスの表現形式は対者敬語だが、3 人称者に向けられる素材敬語

も、聞き手を間接的に顧慮するポライトネスとして機能するという形で、ポライトネスの議論に組み込む見通しまでつけられている——但し、間接的顧慮の具体的なメカニズムについて本研究は B&L と見解を異にする。

敬語の機能を考察するのにポライトネスの概念を導入することの利点が 2 つある。1 つは、同じ NP の手段となる他の言語形式や操作などと敬語を同じ平面で捉えられることである。もう 1 つは、敬語の機能の裏側にある、敬語を用いないことすなわち非敬語形を用いることの機能——相対的に近接的な、ときに PP 的な効果——との対比において敬語を眺めることができる点である。第 1 の点は、間接的であること、と共通性を括ることができる。“いま・ここ”というダイクシス的な時空を外す視点操作によって語りの現場性を薄める手法は、日本語に限らず各言語に一般的なものである。たとえば、時間については現在時→過去時のシフト（典型的には英語の仮定法など）、空間については近接指示→遠隔指示のシフト（英語の *this* → *that* の選択など）、また人称についても“わたし-あなた”の直接性を避ける非人称・非人格・非個人化（英語の *one*、フランス語の *on* など）、といったストラテジーを、敬語との並行性において捉えることができる（端的な例として尊敬語形の「お...になる」における動作→出来事のシフト）。

2 つめの点は、PP についての議論とそのまま重なる。PP の核心は、自分が相手と基本的欲求としてのフェイスを共にするところにある——「自分は相手の欲することを欲する」。それは、共有、共感、あるいは、親密さといった言葉で表される状態を指向する。NP とは逆に、“いま・ここ”にないものを視点操作によって“いま・ここ”に持ち込んで擬似的に現場性を増す手法も、各言語に一般的である。たとえば、直接話法を採用することで、過去のことであっても現在時や近接指示によって語る、あるいは、“わたし-あなた”をさらに融合して“われ=われ”の共同的な行為として表現する、といったストラテジーがある。ただし、PP は相手に接近することによってしか表現・伝達されないため、触れることがインポライトと受け取られるリスクはつねにつきまとう。欲求の見なしにおいて自分と相手の関係が転倒してしまうと、共感的な近づきは不躰な踏み込みに転じる——タメ語の使用が親しみではなく馴れ馴れしさとして受け取られるケースなど。PP はインポライトネスの契機を内包しやすい。

PP についての議論は直接敬語と関係しないため、従来の敬語研究では顧みられることがなかった。しかし、NP と PP（とインポライトネス）という全体的視界を得ることによって、敬語の使用や不使用やそれらの組み合わせによる語用論的效果を正確に捉えることができるようになる。そのことはまた、敬語のコミュニケーション機能を捉えることにほかならないだろう。このことが次の主題となる。

3. 敬語の語用論のために【②-3, ①-III】

上の考察を踏まえて、本研究は「敬語は〈距離〉の表現である」との定義を置く。ここで距離とは社会的ないし心理的な対人距離のことであって、現実の社会における上下（タテ）の関係であれ親疎（ヨコ）の関係であれ、ともに適用可能である一言語が行なうのは関係の抽象と表現であって社会を鏡のように映すことではない。対象に対する遠隔化を敬語の基本義と考え、他方で敬語がもつと言われる多様な用法を説明しようとすることは、単純な意味論と多様な語用論の効果という枠組みで敬語を説明することである。意味論レベルで、対象を遠隔化することは対象の領域に“近づかない”“触れない”ことを意味するが、そのことは文脈次第で様々な待遇を意味することになる。たとえば、（聖なるものを）“汚さない”という文脈からは“尊敬”や“改まり”の推意が、（互いに）“近づかない”という文脈からは“威厳”“品位”などが、（相手にも）“触れさせない”からは“疎外”の推意が、そして、（必要ないのに）ことさらに“遠ざける”という文脈からは“皮肉”の推意が、それぞれ導かれる。それらの推意の結晶化したものが敬語のいわゆる諸用法である。

敬語分類に関して、旧来の3分類（尊敬語、謙譲語、丁寧語）は分類の意義の点でも理論的説明力の点でも問題が多い。一方、純粋なへりくだりである「丁寧語」を「謙譲語」から分離することによって、（さらには明確な対象者のいない「美化語」を「尊敬語」から分離することによって、）敬語の分類が敬語の対象者の区別（と一部その扱い）と対応することになり、日本語敬語の基本的な機能を合理的に捉えることができる。語用論的な観点からは、機能的に相互独立である敬語の性質を正確に把握できる点が大い。各敬語は待遇の対象となる意味役割（ないし統語的役割）と結び付いており、人物として同一であっても、動作主や受容者といった役割が異なれば原理的には待遇も異なるというモデルにおいて用法を説明することができる。

機能的に独立であるということは、言い換えれば、使用された敬語の機能は融合したり変質したりすることがないことになる。先に見た「親愛」の敬語（1 補）の事情を例に取れば、同一人物が兼ねる2つの役割がともに遠隔化されるケース（「...いらっしゃいますか？」[動作主＝聞き手]）では、動作主役割と聞き手役割がそれぞれ独立に（それゆえ二重に）遠隔化されているのに対し、「親愛」の敬語（「...いらっしゃる？」[動作主＝聞き手]）では、遠隔化されるのは動作主役割の方だけで、聞き手役割は遠隔化されない。このことによって、表現される動作（行為）に対しては一定の丁寧さを保ちながら、眼前にいる聞き手を遠ざけることはせずに親しさのニュアンスを伝達する、という表現のメカニズムが可能となる。動作主、受容者、聞き手の三者（別人物）が関与者となるような場合でも、

どの対象にどの敬語が使用される／されないかの区別はすべて機能においてもそのまま保存されるため、それぞれの組み合わせに固有の人間関係像が表現されることになる。

現代日本語の敬語の用法は基本的に、こうした各語彙項目の意味論と、聞き手の位置に移動された視点が使用条件となる「相対敬語」性とによって説明することができる。敬語研究においてよく取り上げられてきた諸現象、すなわち、身内敬語の抑制、自敬敬語、皇室敬語、等々の、時に敬語の基本的機能そのものをめぐる論争を引き起こしてきた現象も矛盾なく解釈することができ、また、タメ語にしばしば感じられる PP など敬語不使用の効果についても同じ平面上で解釈することが可能となる。

敬語の使用と不使用に対するこうしたアプローチは究極的に、コミュニケーションにおいて人びとが、敬語の使用／不使用と（使用に際した）選択によって、そのつど参与者間の人間関係像を描いているものと捉えることを可能にする。同一の状況で敬語使用に関して複数の可能性があるとき、唯一の正用法と他の誤用法があるのではなく、人間関係を捉える複数の仕方があり、それぞれに描き出す人間関係像が異なっている——描き出される人間関係像と話し手の意図が異なる場合の典型が「誤用」である。話し手は、ある状況における人間関係の標準的な捉え方から意図的に逸脱しながらそれとは違う人間関係像を表現することによって、語用論的な推意を聞き手に伝えようとすることができる。具体例として、身内の上位者をへりくだらせることで建前的な関係像を表現することと、その後同一人物を尊敬語待遇することで疎外的に扱う本音的な関係像の表現が対照的に見えるケースを取り上げた。

第1部のパートⅢでは、久野（1978）が提唱し日本語授受動詞「やる／くれる／もらう」の意味記述に適用した「共感度」の不等式を日本語敬語に応用することを試みた。共感度とは話し手が対象人物をどの程度自己同一視できるかの度合いとされる。言い換えればこれは、どの程度話し手に近い（話し手側）かをスケールにしたものであり、遠近を逆にすれば話し手からの〈距離〉を表す指標と解釈できる。上で見てきたように、日本語敬語が対象者（役割）を遠隔化することで待遇する言語形式であるならば、敬語の意味記述にも応用できると考えられる。

このことはまた、敬語が同じ共感度の概念で記述される授受動詞と共通の機能性を有していることの証ともなる。授受動詞においては、「やる・あげる」で主語（与え手）に対する共感度が大きく（話し手に近く）、「くれる」で主語（与え手）に対する共感度が小さく（話し手から遠く）、「もらう」で主語（受け手）に対する共感度が大きい（話し手から近い）、と記述される。一方、敬語においては、（動作主や受容者が聞き手と別人物のケースを例に取れば、）共感度の関係は、「尊敬語」で 聞き手＞動作主 となり、「謙譲語」で 聞

き手>受容者 となり、「丁寧語」で 動作主>聞き手 となる（不等号の小さい側が話し手から遠い側）。

このような記法をあえて導入する最大の利点は、共感度の不等式の一つ一つが、そのまま当該の語の意味論であると同時に使用条件（視点に関する適切性条件）の記述も兼ねているからである。敬語の複合的な用例などをこれによって書き表すことで、参与者間の関係を容易に把握することができるのみならず、授受動詞によって表現される参与者間の遠近の関係を比較対照するといったことが可能となる。さらに、人間関係によっては複数の不等式をつなぐことができる場合もあり、そのときには結果として参与者間の〈距離〉の関係が一元的に表現されることになる。各語の意味論は意味論として、それらが複合した語用論的效果において参与者間の遠近の関係がどのように表現されるかの予測が可能となる。

補・「人称説」をめぐって [③-3、①-Ⅲ-1]

山田孝雄の影響としてもう一点無視できないのが、敬語使用による主語推定効果をもって、日本語が欠いている文法範疇としての人称と同等の機能が実現されていると説いた「人称説」である。山田（1924）はその“発見”を宣言するために書かれたと言ってもいいような書物で、文の主語が1人称相当のときは謙譲語が、2人称では尊敬語が用いられるという具合に、敬語の種類が主語の人称と対応しているとの説が展開された。山田はそれが、偶然の産物ではなく必然的な法則であると強調したが、そもそもが強すぎた主張だったと言わざるを得ない。3人称では特定の対応が見られないことは山田自身認めざるを得なかったし、1人称と2人称では、山田の取り上げる例が顕著ではあるとしても、山田の“法則”に反する用法（1人称主語に対する尊敬語使用や2人称主語に対する謙譲語使用）もそう珍しくないか、少なくとも存在は十分に知られている。結局のところ、1/2/3人称主語のすべてにおいて、尊敬語、謙譲語、丁寧語、および非敬語の形があり得、そもそも山田の主張した人称と敬語の種類との対応という事実自体が認定できないと言わざるを得ない。

後世の研究者たちは「敬語的人称」といった用語で人称説を温存しようとした。しかし、その内実は「...側の人物」という意味合いであって、指示詞コソアの区分を「人称説」で行うような場合と変わらない。文法概念としての人称との関係は薄く、話し手側／聞き手側／それ以外の人物という区分を「1/2/3人称者の領域」といった意味で当てたにすぎなかった。その点を捉えるためなら、「人称」よりも「領域」といった用語の方が明らかに適切である。そして、「領域」の問題であれば、上の共感度の（すなわち〈距離〉の）不等式が表すような関係のことであるから、語用論との親和性が高い。一方、「人称」という語

は文法的つまり法則的な対応を思わせるため、(山田が望んだように) 統語論的現象であるかのような錯覚を生じさせてしまう。日本の敬語研究はもっと早く人称説と訣別してよかったと本研究は考える。

4. 距離の語用論 [②-4, ①-II-1, ②-6]

ポライトネスのような理論的基盤を置くことは、とりわけ対人関係に関わる社会語用論的な現象全般を扱う共通のプラットフォームとして意義がある。日本語において〈距離〉を表現することのできる言語形式としては、敬語のような対人関係専用のものが顕著だが、それ以外にも(諸言語同様)、他の機能を本務としつつ対人関係表現に転用されるものが多々存在する。本研究では、それらを取り混ぜ、呼称(②-4, ①-II-1)、指示詞(②-4)、終助詞(②-6)を代表的な形式として考察する。それぞれの位置づけを総括としてあらためて整理するならば、対人関係専用形式である敬語は、素材敬語が命題構成要素、対者敬語がモダリティ要素と分かれる。呼称は対人関係専用形式でモダリティ要素、指示詞と終助詞は対人関係専用でなく、指示詞は命題構成要素(ただしダイクシス的)、終助詞はモダリティ要素である。

対人関係専用形式である呼称は、相手を呼ぶことがすなわち相手についての話し手の認識を言語的に確認する機能をもつ。呼称は原則的に命題内容に寄与しないことを考えれば、(命題構成要素にもまたがる) 敬語以上に純粋な、言い換えれば最も原初的な〈距離〉表示の形式であると言える——B&L も呼称の機能の考察からポライトネスの一般理論への着想を得た。ヨーロッパ系言語によく見られる T/V の体系は遠近の対立をそのまま利用した例と言えるが、日本語の呼称体系も〈距離〉の観点から整理することが可能である。日本語の呼称を遠近で捉えた先駆的業績は法学者穂積陳重のもので(穂積 1919)、穂積は「近くは賤しく遠きは貴し」との簡潔な表現によって、現代のポライトネス理論にもそのまま応用できる呼称論を展開した。日本語の呼称が全般的に遠隔的な避称であることの指摘や、近接的な親称が罵称に転じやすいことの指摘など、先見性に富んでいた。なかでも、1 人称と 2 人称が反転する呼称反転現象——「われ」や「おのれ」が 2 人称者に対する罵称となるなどの反転自称——への注目は独創的だったと言える。

本研究はそうした知見を基礎に置きながら、呼称におけるポライトネスの相対性を強調する。ある呼称が伝達するポライトネスとは、用いられる語があらかじめ帯びているポライトネスの絶対値のようなものではなく、現実の(客観的な)人間関係を反映した呼称との偏差において測られるべきものである。たとえば、見知らぬ人を「社長!」と呼んだり皇太子に「皇太子さま」と呼びかけることは、架空の業務的人間関係に引き込んだり略式

の敬称使用によって客観的呼称よりも近接的に響くゆえに、(NP 的ではなく) PP 的なニュアンスを帯び得ると説明できる。そうした意味で、呼称のポライトネスもまた、文脈効果による語用論的效果として捉えるべきものである。

呼称が人の体系なら指示詞は事物の体系である。日本語の場合、呼称の語彙が（敬意減などの事情で）増殖してきたのとは対照的に、指示詞は基本的にコソアの整然とした体系をなす。“いま・ここ”の現場指示を基盤とする指示詞ゆえ、遠近の区分が基本の対立だが、日本語指示詞は 2 系列ではなく 3 系列体系である点に特徴があり、遠近（および他の対立）がどのように組み合わさっているかが理論的関心事となる。当然、本来対人関係を表現するための形式ではないが、他の言語でもそうであるように、同一の事態を表現する複数の可能性があるとき、話し手によるその選択は聞き手に対する話し手の対人的な距離感を反映することができ、その表現の間接的な手段となる。日本語の指示詞は、3 系列体系である点と、語の選択における話し手の裁量がかなり広いと考えられる点で、表現する対人距離との関係が興味深い。

従来、コ<ソ<アの順で距離なり人称なりが大きくなる直線的体系が想定されてきたが、近年異なる解釈が提出されている（金水・田窪 1992 など）。本研究も、意味分析的な文例テストの結果から、ソ系における疎遠・疎外的な意味合いとア系における親近的な意味合いを抽出した。それに基づき、まず話し手にとっての直接的経験か間接的経験かという区分が コ・ア 対 ソ という大きな二項対立によって表現され、その上に、“いま・ここ”の近接性における コ 対 非“いま・ここ”的遠隔性における ア という遠近の区分が重なる図式を提出する。「直接的経験／間接的経験」について付言すれば、物理的な経験の質によって自動的に決定されるわけではなく、とりわけ後者については、話し手が自分自身の独占的管理下に置くことを放棄することによって間接的経験化されて、他者にも対等のアクセス権がある情報として提示されることになる（たとえば、背中を搔いてもらっている人が言う「そう、そこ！そこ！」におけるソ系使用）。

終助詞はモダリティ要素として、話し手の述べ方についてメタ・コメントを表現・伝達する要素である。「対人的モダリティ（聞き手めあてのモダリティ）」とされるが、終助詞が「対人的」なのは、呼称がそうであるのとは次元が異なっている。意味分析的な文例テストの結果、現代日本語の終助詞「よ／ね／か」は、述べられる情報が誰のどのような管理下にあるかを表す小さな体系をなしていることが判明する。あくまで述べる事柄に付されるメタ・コメントであるから、それ自体が対人的な機能をもつモダリティではないとさえ言える。それにもかかわらず終助詞が対人的モダリティと言われるのは、ここでもやはり、述べられる事態の客観的状态が自動的に終助詞の選択を規定するのではなく、話し手

が聞き手に抱く期待まで含んだ態度によって選択され、そのことが話し手の聞き手に対する対人的距離感を反映すると考えられるからである。日本語の場合、客観的状态に照らして使用可能な終助詞は多いといえ、その分だけ、話し手がもつ語用論的な裁量の幅も大きいことになる。

終助詞の意味論と語用論については、多くの先行研究があるにもかかわらず決着を見ていなかった。先行研究の不具合は、話し手が話す以上、話し手は当該の情報を“知って”おり、それゆえ話し手はその情報を所有すると扱ってきたところにある。話し手が知っているか知らないかということと、話し手が当該の情報を誰の管理下にある（べき）ものとして話すかということは、独立に操作し得る事柄であって、終助詞はこの後者に関する言語的標識であることを本研究は確認する。情報の客観的なありようによって自動的に選択されるわけではなく、話し手はその情報を知っている、“自分の管理下にある”との標識を付けずに提示することもまったく可能である（たとえば、「ね」の1用法がそれで、たとえば、相手の要求を「いやだね」と言って断わる場合など）。

本研究は、終助詞の意味論についてもきわめて単純な体系を提唱する。素性指定の方式で、[話し手の管理下にある（べき）／でない]と[聞き手の管理下にある（べき）／でない]の2組のいずれか一方だけが指定されるいわば基本終助詞が「よ／ね／か」の3つであり、それぞれ、[+話し手]、[+聞き手]、[-話し手]と指定される。[話し手]素性と[聞き手]素性の両方を指定したければ、語を組み合わせればよく（たとえば、「よね」=[+話し手、+聞き手]のように）、それが接続形の終助詞である。終助詞の先行研究では、「よ」と「ね」を対立的に捉えようとしたものが多いが、本研究の結果によれば、指示詞の場合と似て、大きな対立は「よ・ね」対「か」の間にあり、その上で「よ」と「ね」が相対的な距離感の差として対立する関係にあると言うべきである。

以上のように、本研究は、呼称、指示詞、終助詞という対人関係に敏感な言語形式がもつ機能についても、対人距離における遠近の比較的単純な組み合わせとして説明・解釈することができることを示した。また、それらが果たしている日本語コミュニケーションにおける語用論的機能について、いわば対人距離の角度から見た断面図を何枚か描き出したと言えるだろう。

5. 敬語とポライトネスの対照語用論 [②-5, ④-1~5]

以上はもっぱら日本語を対象とした考察だったが、それを進める過程で、近隣言語である韓国（・朝鮮）語や中国語におけるコミュニケーションとの相違の大きさが際立ってきた。韓国（・朝鮮）語は日本語と同等の敬語体系を有する言語、中国語は系統的にかけ離

れた、しかし共産党革命以前は敬語を盛んに用いた言語だが、諸言語行為に着目して観察すると、日本語とは対人距離感が多くの点で異なっているように見える。そこで、1つの応用的な展開として、ポライトネスを基準とした言語文化論的な考察を、これら近隣諸言語との間で行う。その際に、日本語と近隣諸言語との対人距離感の相違が、元から存在する相違なのか、何か別の経緯の結果として生じた相違なのかという点に着眼する。言語行為としては、原初的に対人距離感を反映すると考えられる「あいさつ」を中心に考察する。

日本語での日常的言語生活において強調されることの多い「あいさつ」だが、定型性への強い指向や決まった場面での使用の義務性がいつの時代まで遡れるかは検討の余地がある。江戸庶民のコミュニケーションを伺い知ることのできる資料や、明治・大正期の作法に関する資料から判断すると、日本語の近代以前、具体的には「標準語」の制定とその流布以前においては、庶民のコミュニケーションにおける「あいさつ」のありようは現在とかなり異なっていたものと推測される。「あいさつ」は、標準語教育を通じて「作法」の一環として教えられた形跡が見られ、その中で、作法の型として定型的なあいさつ言葉と固定的な使用場面が強調された可能性が示唆される。作法の型はコミュニケーションの型として定着し現代に至っており、現代日本語では、あいさつのみならず、感謝や謝罪といった言語行為においても、談話の型と言うべきパターンを認めることができ、定型性の強さがより強固なものとなっている。

一方、江戸庶民のコミュニケーションを会話体で書き表している滑稽本を資料として見ると、現代語のあいさつとはかなり異なる特徴を抽出することができる。具体的には、感動詞や応答詞と呼称の使用が顕著であること、また、あいさつ本体の言葉も定型性が弱く、実質的な意味を保っている場合が多いことが挙げられる（たとえば、定型的あいさつ言葉としての「おはよう（ございます）」ではなく、感動詞と呼称に続けて実質の意味をもったあいさつが続く「ヲやお鯛さんお早うございますネ」といったあいさつなど）。現代語では、感動詞「あ」はよく用いられるものの、あいさつにおける呼称はフォーマルになればなるほど不活発で、非常に対照的と言える。あいさつ言葉自体の強い定型性と合わせ、標準語以前と以後の間に不連続のあることが確認される。

次に、近隣言語として中国語におけるコミュニケーションとの比較を行う。（大陸）中国語の言語行為は、人間関係の上下親疎によって劇的と言ってよいほどの変化を見せる。全般的に、家族や友人のような近しい関係においては、あいさつ言葉や感謝・謝罪等の定型句の使用が不活発で、日本語的な感覚からすれば、家族や友人にはあいさつをせず、感謝や謝罪の言葉も言わないかのように見える。実際には、非定型で実質の意味を合わせもった多様な表現が用いられ、それらがあいさつとして機能する。一方、近しくない関係、す

なわち初対面の関係やとりわけ権力を伴った上下の関係などにおいては、定型的なあいさつ言葉が盛んに用いられる。こうした傾向は、謝罪のような言語行為においても同様に見出され、中国語のコミュニケーション・スタイルが人間関係によって大きく分かれることを示唆している。家族内や友人間でも定型的なあいさつをし、感謝や謝罪の定型句もしきりに用いる日本語とは対照的である。もう一点、注目すべきこととして、呼称の重要性が高いことがあり、定型的なあいさつ言葉でもしばしば呼称を伴うし、非定型的なあいさつにおいても、適切な呼称をすることがそのままあいさつとして機能する側面も認められる（とりわけ台湾など）。この点についても、呼称しなくなった日本語とは非常に対照的と言える。

韓国（・朝鮮）語〔韓国内の事情のみ参照したため、以下単に「韓国語」〕は、日本語との系統関係こそ証明されないものの、文法構造の共通性はきわめて大きく、発達した敬語の体系を有し、かつその組織は日本語敬語と同一の枠組みで比較可能なものである。また、韓国語敬語は日本語よりも、直接聞き手に向けられる敬語である対者敬語が発達しており、中でも最敬体というべきハムニダ体は日本語の敬体（です・ます体）よりも高い敬意を表す。こうした特徴からは、日本語以上にネガティブ・ポライトネス（NP）への傾きが強い言語とも思われようが、実際にはそうではなく、むしろポジティブ・ポライトネス（PP）の表現が顕在的であることの上に NP との対比がつくられる、対人距離感の振幅が大きい言語と見なくてはならない。近しい人間関係における対人距離は日本語よりも中国語に近いと言え、定型的なあいさつよりも非定型で多様な表現が目立つ。NP が基本となるような人間関係においても、近代に入ってから発達した非格式的な敬意を表すと言われるヘヨ体がハムニダ体と対比的に用いられるため、NP の中で、より敬避的な距離感とより共感的な距離感が相対的に使い分けられるようなスタイルとなる。共感的な傾きをもった丁寧体には、言語の形式面のみならず内容面も大きく関与しており、“-seyo (...てください)” 式のあいさつを典型とする「気遣いの踏み込み」とも言うべき言語運用が顕著に見られる。言語の構造・体系面からすると日本語と同様の対人距離感を帯びてもよさそうな韓国語がそうでないという知見は、近代以降の日本語における対人距離感の敬避的性格の強さを際立たせることになる。

以上からも予想されることだが、あいさつや諸言語行為において話し手が聞き手との距離をどう表現したかという観点から見た場合、日中韓それぞれの言語文化におけるコミュニケーション・スタイルは、中韓 対 日本という組み合わせで興味深い対照を見せる。あいさつでは、非定型的で多様なことを言い、また相手の私的な領域に踏み込んだ詮索的な問いがあいさつとなるといった共通性をもつ中韓に対し、日本語における定型性への傾きの強さと、相手の領域や“本題”に触れることの回避傾向（たとえば、「こんにちは

は（＜今日は…）」や「さようなら（＜左様なら…））」が際立っている。また、依頼や勧誘に対する断わりやほめに対する応答といった言語行為に目を向けても、とりわけ近い関係において PP やそれを受け容れる応答が顕著な中韓に対し、全般的に人間関係の遠近にさほど関わりなく NP が強い NP 寄りの表現が顕著な日本語という傾向が観察される。

現在の日本語において、あいさつにせよ感謝や謝罪といった言語行為にせよ、定型性と NP への強い傾きがあることは明瞭に観取できる。一方、江戸の庶民の言葉にはそれと異なる特徴が見出され、また方言においても異なる特徴が認められる。また、中国語や韓国語といった近隣言語のコミュニケーション・スタイルの特徴も、現代日本語とは相違が多く、類似性はむしろ江戸庶民や方言のそれとの間にあるとさえ言えるかもしれない。これらを元に考察するならば、現代日本語のコミュニケーション・スタイルは、明治中期～大正期に成立した「標準語」とともにもたらされたものと言ったべきように思われる。（標準語のコミュニケーション・スタイルの淵源については本研究では追求していないが、江戸時代までの武家や公家の作法のある部分が引き継がれたといった経緯があるだろう。）標準語の導入によって、言語生活において、ときとしてコミュニケーションよりも作法の実践としての側面が重視され、ともすると内容よりも型の側面が重視されるに及んで、形式性が強く NP への傾きを一層強くしたコミュニケーション・スタイルが確立したのではないかと、本研究は考える。

言語にとっての外的要因まで考慮したこうした知見は、従来語用論の議論に乗せられることが少なかった。しかし、語用論的現象として話し手の意図との関係において捉えられるであろう現代日本語のコミュニケーション上の特徴に、かなり偶然的な歴史的事情が強く関与しているのであれば、むしろそのことを明確に捉えて共有していくことが、異文化コミュニケーションや日本語教育にも資することになろう。

結 語

以上、敬語とポライトネスに関する〈距離〉の語用論を試みた。そこでは、まず、日本における敬語の研究史から〈距離〉の敬語論を導き、それを B&L のポライトネスの理論に接続するとともに、ポライトネスの理論もまた〈距離〉の観点から読み解いた。次には、ポライトネスの理論を前提として、敬語や呼称の語用論を検討し、さらには、それら対人関係表現の専用形式に加え、指示詞や終助詞といった転用形式にも、遠近の軸による〈距離〉の語用論が可能であることを見た。最後には、諸言語行為を東アジアの近隣諸言語と比較対照することを通じて、日本語における NP および定型表現への傾きの強さと、中国語や韓国語における PP および非定型表現への傾きとを確認し、日本語と近隣諸言語との

間で対人距離感に実質的な相違があることを見た。そして、現代日本語の対人距離感は、明治後期以降の標準語の制定と普及の過程における作法的な位置づけが大きく影響しているものと考えられた。

ここから、本研究が提出する主張を改めて抽出するならば、次の5点になろう。

- (1) 現代日本語における敬語は、敬避的遠隔化に基づく相対的な〈距離〉の表現手段として、参与者間の人間関係像を表示する語用論的装置としての側面を強く有する。
- (2) すべての語用論的効果がそうであるように、敬語の語用論的効果もまた、非敬語との対比や、敬語の他の組み合わせとの対比において、相対的な距離の相違として説明すべきものである。
- (3) ポライトネスと距離という共通の基盤を導入することで、敬語の語用論的機能を、授受動詞、呼称における対人関係表現の機能や、指示詞、終助詞におけるような転用的効果と、同じ平面上で論じることができ、かつかなり単純な遠近の組み合わせで説明することができる。
- (4) 現代日本語のコミュニケーション・スタイルは、定型性と NP への強い傾きにおいて特異的と言ってよく、非定型表現と PP が顕在的な近隣の中国語や韓国語とかなり大きな対照をなす。
- (5) 江戸庶民の言葉や方言との比較を加えても、現代日本語における上の特徴は、明治半ば以降の「標準語」制定以降のものと示唆され、その経緯としては標準語が作法の一環として教育されたことの影響が大きいと考える。

これらの主張を含んだものとして、博士の学位申請論文『日本語敬語および関連現象の社会語用論的研究』を提出する。

本論文の第1部や第2部を単行本として刊行してから、10年前後の時が経過した。その間に滝浦の主張に対する批判的な見解なども出されているので、簡単にコメントしておきたい。

まず、敬語〈距離〉説をめぐって、さして目新しいとも思われない見解をことさらに主張しすぎである、との山下仁による批判がある（山下 2007）。これについては、山下は滝浦の主張の意味を理解していないとコメントしたい。自分は敬語〈距離〉説を、斬新でユニークな学説として提示したのではない。冷静に考えれば十分思いつきそうであり、現に、少数とはいえそうした敬語論を展開した学者がいたにもかかわらず、なぜその敬語観が広

く受け入れられて日本の敬語論の主流にならなかったのか？を批判的に考察すること自体に、この百年間にわたる敬語研究を問い直す意義があると考えたからである。

また、菊地康人や森山由紀子のように、間接または直接的に、敬語〈距離〉説を誤りであるとして異を唱える学者もいる（たとえば、菊地 2005、森山 2010、森山・鈴木 2011）。しかし、自分の見るところ彼らの批判は、現実の社会にはタテ（上下）の関係としか言えないものがあるとか、敬語がそうした関係を表現することができる、あるいは、敬語のある用法がそうした関係を前提として用いられている、といった主張にすぎない（滝浦 2008b も参照）。〈上下〉で決められるのは、現実の人間関係と、せいぜいが敬語の使用条件の一部だけである。自分は言語の研究をしているのであって社会の研究をしているのではなく、自分が提出したのは、言語という装置が現実社会の何を見て何を抽象して表現しているかという問題である。彼らの議論は共通して、敬語の意味論と語用論を混同しているために、自ら隘路に陥っているように見える。

さらに、蒲谷宏もまた滝浦に批判的な言及をしながら、敬語の使用がポジティブ・ポライトネスを表す場合があるとわざわざ書いている（蒲谷 2013: 15）。これは、「親愛の敬語」の幻想や錯覚をわざわざポライトネス的に“解釈”し直した現代的バリエーションであると言うしかない。

「ポライトネス」理論自体の変遷についても触れておきたい。Watts や Eelen らによって提唱された言説的（discursive）アプローチが認知度を高め、B&L に代表される、話し手が意図してポライトネスの推意を伝えようとするとのモデルは合理主義的（rationalist）アプローチとして批判の対象となった。

このことについては次のように考えている。後者による前者の批判という形で言及されることが多いが、2つのアプローチは“見たいものが違う”と考えるべきである。旅行者でも留学生でもかまわないが、背景的な言語文化が異なれば、対人関係における言語的なふるまいには明らかに相違がある。そうした意味での「X 語のポライトネス」を考えることは依然として可能であり有効だと言うべきだろう。過剰な一般化をしてしまう危険性には十分自覚的である必要があるが、B&L の 3 要因（人間関係要因と事柄要因）を検証する実証的研究の結果においても、それらの有効性と文化的要因による相違が示されている（Kiyama, Tamaoka, and Takiura 2012、Kiyama, Takatori, Lim, and Tamaoka 2016 など）。他方、会話という相互作用の場において起こっている事象としての（イン）ポライトネスやフェイスワークを知りたいと思うなら、会話分析に近い手法で会話の流れを追いながら、ポライトネス～インポライトネスの動きを逐次的に見ていくような方法が必要となる。そ

れが言説的アプローチだろう。

本論文は、会話の中でのポライトネスを論じた部分もあるが、大枠では合理主義的アプローチによる研究と言ってよい。しかし、以上のような理由で、直ちにこれが“すでに古いアプローチ”による研究ということにはならないと考える。

参考文献（要旨内）

- Brown, P. and Levinson, S.C. (1987/1978) *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Chamberlain, B. H. (1888/1889) *A Handbook of Colloquial Japanese*. London: Trübner / Tokyo: Hakubunsha.
- Durkheim, É. (1912/1990) *Les formes élémentaires de la vie religieuse: le système totémique en Australie*. Paris: Les Presses universitaires de France / Paris: Félix Alcan.
- Goffman, E. (1967/1982) *Interaction Ritual: Essays on Face-to-Face Behaviour*. New York: Anchor Books / New York: Pantheon Books.
- Grice, P. (1989) *Studies in the Way of Words*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- 穂積陳重 (1919) 『諱に関する疑』 (帝国学士院第1部論文集 邦文第2号) 帝国学士院
- 蒲谷 宏 (2013) 『待遇コミュニケーション論』 東京：大修館書店
- 菊地康人 (2005) 「『敬語とは何か』がどう変わってきているか」『日本語学』24(11): 14-21、東京：明治書院
- 金水 敏・田窪行則 (1998) 「談話管理理論に基づく『よ』『ね』『よね』の研究」、堂下修司・白井克彦・溝口理一郎・新美康永・田中穂積 編『音声による人間と機械の対話』東京：オーム社
- Kiyama, S., Tamaoka, K., and Takiura, M. (2012) "Applicability of Brown and Levinson's Politeness Theory to a Non-Western Culture: Evidence From Japanese Facework Behaviors." *SAGE Open*, 2012 2.
- Kiyama, S., Takatori, Y., Lim, H., and Tamaoka K. (2016) "From Universal Perceptions to Diverging Behaviors: An Exploratory Comparison of Responses to Unreasonable Accusations among People from the United States, Japan, and South Korea." *International Journal of Linguistics and Communication*, 4(1): 19-33.
- 久野暲 (1978) 『談話の文法』 東京：大修館書店
- 松下大三郎 (1923) 「国語より観たる日本の国民性」『國學院雑誌』29(5): 36-72

- 三橋要也 (1892) 「邦文上の敬語」 『皇典講究所講演』 71, 72 号
- 三上 章 (1942/1995) 「敬語法の境界線」 『コトバ』 4(12): 29-32、東京：国語文化研究所
／東京：ゆまに書房
- 森山由紀子 (2010) 「現代日本語の敬語の機能とポライトネス ——『上下』の素材敬語と『距離』の聞き手敬語」 『同志社女子大学日本語日本文学』 22: 1-19、同志社女子大学
日本語日本文学会
- 森山由紀子・鈴木亮子 (2011) 「日本語における聞き手敬語の起源 ——素材敬語の転用」、
高田博行・椎名美智・小野寺典子編『歴史語用論入門 ——過去のコミュニケーション
を復元する』 東京：大修館書店
- Rodriguez, J. (1604-08) *Arte da Lingoa de Iapam*. Nagasaki: Seminário.
- 時枝誠記 (1938) 「場面と敬辞法との機能的関係について」 『国語と国文学』 15(6)、東大
国語国文学会
- 時枝誠記 (1941) 『国語学原論』 東京：岩波書店
- 山田孝雄 (1924/1970) 『敬語法の研究』 東京：宝文館／東京：宝文館出版
- 山下 仁 (2007) 「グローバリゼーションと敬語研究」 『ことばと社会』 10: 136-158、東京：
三元社
- Yule, G. (1996) *Pragmatics*. (Oxford Introductions to Language Study) Oxford: Oxford
University Press.